連載エッセイ 186
人生讃歌

まだ見る夢

十五年ほど前から二年に一回くらい、夜、眠っているとき繰り返し見る夢が二つある。一つは七十歳を過ぎても苫小牧工業高校を卒業できず、教室の机に座っている光景である。まわりの生徒は十六、七歳なのに自分だけ腰の曲がった老人で、いまにも死にそうな悲愴な顔をして中空を見つめている姿である。

もう一つの、やはり二年に一度ほど見る夢は、働くところを探して走り回る場面である。八十歳のぼくが見おぼえのある新聞社の玄関へ行って土下座し、「働かせてください」と頼み込む光景だ。眼の前に立っている新聞社の地位の高そうな人に「君のする仕事はない」と言われ、ぼくは「十九歳のときこの会社で文選工として働かせてもらったんです。それと同じ活字ひろいで使ってください」と頭を床にこすりつけて必死に頼みつづけるが、仕事はないと断わられる場面である。

白髪頭のてっぺんが禿げたぼくは「三日に一度でも五日に一度でもいいですから何とか働かせていただけませんでしょうか。もう行くところがないんです」と泣きつくのである。それでも働くところはないと言われ、ぼくは絶望して立ち上がる。よろけながら会社の建物を出て「どうしよう、どうしよう」と呟きながら街路を歩いて行く夢である。

老夫になっても見るこの夢は、いったい何なんだ。

★

ぼくが苫小牧工業高校を出た一九五六年は第二次世界大戦に敗けて十年後くらいで、ひどい就職難だった。たまにくる求人も成績優秀な生徒が決まっていった。ぼくは大学へ行くつもりで受験勉強をしていたから電気の教科は駄目だった。親の猛反対で大学を断念、担任教師のすすめで電力会社を受けた。一次、二次が通ったのは担任によるぼくの成績の大幅な改竄に違いなかった。しかし面接で四十人採用のところ百五十人もいて、ぼくはあきらめた。あきらめたが、もしかしたらという気持ちもあった。だが、やはり落ちた。

高校三年の晩秋、北海道新聞社から印刷工や文選工の求人がきて、ぼくは受けた。職種や仕事の内容を言っている場合ではなかった。働かせてもらえるところなら、どこでもよかった。だが筆記試験場の札幌時計台前にある産業会館へ行って驚いた。二十三人採用のところ四百人ほどの受験者がいたのだ。ぼくがこの会社に受かったのは奇跡である。

★

北海道新聞社で働かせてもらいながら隠れるように小説を書き、二十年がたったころだ。会社をクビになると怯えたことが二度ある。一度は三十九歳で『出刃』という小説が芥川賞の候補になって単行本が発売されたときである。突然、社長室へ呼ばれて息がとまった。会社から給料をもらい、小説を書いて原稿料をもらい、会社の仕事がおろそかになると思うのは当然だった。免職になると思った。

社長室へ行くとき一瞬、著書に署名して持参しようかと思ったが、いかにも見えすいた物ほしげな振る舞いの気がして

【小檜山 博 文学館が開館】2020年11月1日から北海道滝上町の文化センター内に、生原稿、掲載誌、文学賞、日記、写真、創作メモ、新聞記事など、70年にわたる活動資料の展示が開設されました。　紋別郡滝上町栄町（滝上町文化センター内）　☎0158・29・3735　10:00～17:00　年末年始休館（12/31～1/5）
アクセス：札幌駅からバスで約4時間30分、旭川駅からバスで約2時間30分　紋別空港から車で約40分

やめた。社長室へ入ると上関敏雄社長が椅子に座ったまま、机の上の『出刃』をぼくのほうへ押してよこし「頑張ったな。なにわ書房で買ってきて読んだ。面白かったぞ。サインしてくれ」と言った。笑顔だった。ぼくは仰天のあまり倒れそうになった。

今度こそクビになると震え上がった二度目は、やはり勤めながら書いていた四十六歳のときで、ぼくが東京へ移って書くという妙な噂が広まったころだ。文芸誌「すばる」に連載した『光る女』が泉鏡花文学賞をいただき、この小説で、なんと自分が勤めている会社の北海道新聞文学賞も受賞

な。

挿絵／中江潤一

したのだ。

そんなとき渡辺喜久雄社長に呼ばれた。以前にも書いたが、社長室へ入ると社長に「君、会社やめるってか」と聞かれ、ぼくは即座に「いいえ」とこたえた。社長が「それならいいんだけどな。食う心配ないほうが、いいもの書けるんでないのか」と言った。ぼくはどうこたえていいかわからず黙っていた。社長が「よしわかった、もういい」と言い、ぼくは出口に向かった。背後から社長が「いいか、会社やめるなよ。もしやめるときは直接、俺に断れ」と言ったのだ。社長室を出るといきなり眼からあふれた涙が、棒になって足元へしたたった。そしてぼくは六十七歳まで四十九年間、この会社に勤めさせていただいた。

★

しかしぼくは会社に申しわけないと思っている。たしかに二十年間、新聞づくりにたずさわらせてもらい、そのあと三十年近く図書編集部で百四十冊の単行本を作らせてもらったが、一歩会社を出ると物を書き講演に走り回っていたのだ。自分では会社の仕事を一応ちゃんとやっていたつもりだが、散漫になっていたかもしれないのである。それを見逃してくれていたのである。心の底から深く感謝する。

★

老骨となったいまなお夢に見続けるということは、六十八年前の就職先がなくて眠れないほど怯えていたとき採用していただいた感謝が、いまもって気持ちの底にあるからだろう。浅はかで思慮深さに欠けるぼくが、これほどしつこくこの夢を見続けるのは「いいか戯、おまえは厄介者だったんだぞ？自分の力で生きてきたなどと思い上がるんじゃないぞ！」という一喝と縛りに違いない。 Ⓙ

■小檜山　博（こひやまはく）：作家。神田日勝記念美術館名誉館長。1937年・北海道滝上町生まれ。『出刃』で北方文芸賞受賞。『光る女』で泉鏡花文学賞と北海道新聞文学賞受賞。1997年・札幌芸術賞受賞。2003年『光る大雪』で木山捷平文学賞受賞。2005年・北海道文化賞受賞。2007年・北海道功労賞受賞。